

ふるさとの先輩から

坂田友紀さん（平成元年3月 御船中卒業）

私は生まれも育ちもこの御船です。この御船に住んで良かったと思うことが二つあります。

一つ目は自然です。家の近くには御船川が流れています。小学校時代の登下校では、沿道に茂っている草花で遊び、近道と称しては田んぼを横切って帰っていました。眼鏡橋もまだ、残っていて、写生大会の時は必ず行く場所でした。俳句を作る授業では、稲刈り終わった田んぼに寝そべり空を眺めながら句を考えたこともありました。小中学校時代を自然豊かな中で過ごすことができました。

そしてもう一つはご地域の方です。

最近マスメディアでは近所づきあいがなくなったといわれることが多くなりましたが、この御船ではそんなことはありません。私の子どもたちも、近所の方がいつも見守ってくださいます。「あいさつば上手にしよったよ」とほめてくださいます。子どもに伝えるとうれしそうです。そして、またあいさつをしているようです。私が「あいさつをしてね」と言うより近所の方がほめてくださった言葉が行動の原動力になっています。また、子どもたちを叱ってもくださいます。「ごみ置き場の上ののって遊びよったよ。落ちたらあぶなかよっていっとったけんね。」成長すると子どもたちの行動範囲は広がります。そして、親の目を盗んでいたずらもします。そんな時に声をかけてくださり、地域で過ごすルールを教えてくださいます。地域で育ててもらっていると実感します。このようにほめたり、叱ったりしてくれる地域の方は子どもたちだけではなく、私自身にもありがたい存在です。

この御船は、昔も今も変わらない自然が残り、声をかけてくださるおじちゃんやおばちゃんがいらっしやいます。みなさんも、御船で生まれ育ったことをぜひ誇りに思っしてほしいと思います。こんなすてきな町は他にはありませんよ。

ふるさとの先輩から

山下直樹さん（昭和63年3月 七滝中卒業）

私は、中学校では野球をしたいと思っていましたが、野球部がなかったため、陸上部になんとなく入部しました。しかし、なんとなく入部した陸上が、その後の自分の人生に大きな影響を与えることになりました。

入部してすぐに1500メートルのタイムを測ると自分の実力は、ちょうど真ん中くらいでした。私は、どうしても秋の郡中体連駅伝に出走したいという目標があり、自分なりに努力をして、試走で何回もタイムトライアルをして、やっと郡中体連駅伝の一年生区間のレギュラーを取ることができました。結果、大会の雰囲気にもまれ、前半突っ込みすぎて、後半失速し、試走のタイムよりも悪く、三年生にとっての最後の大会に花を添えることはできず、とても悔しい思いをしました。自分のメンタルの弱さを改めて感じました。2年生の秋から冬にかけてタイムが一気に伸びてきて郡市対抗熊日駅伝大会の上益城郡チームの補員に選ばれることができました。そのあとに開催された益城町一周駅伝では区間賞をとり、チームの優勝に貢献することができました。陸上は孤独なスポーツでもあるので、自分自身に勝つということも競技力を向上させるためには大事なことだと考えました。3年になると本当にいいチームができました。結果、郡中体連駅伝大会優勝、県中体連駅伝大会4位という成績を残すことができました。その当時の陸上部の顧問の先生とは今でもたまに会うことがあります。その後、転勤された学校でも陸上部の顧問として活躍されており、素晴らしい選手を育てられています。山間地の学校でもチーム一丸となって目標に向かって頑張って走った日々が懐かしいです。

このような経験から、失敗することで自分を見つめなおすことや考えることの大事さ、それが、自分自身の成長に繋がるということを学ぶことができました。陸上を通していろいろな人との出会いがあって、自分の宝物となっているので今後も大事にしていきたいと思います。

ふるさとの先輩から

北本修吾さん（昭和44年3月 御船中卒業）

御船中を卒業して52年。私たちの中学時代は、東京～大阪間に新幹線が開業し、東京オリンピックが終わった頃です。各学年7クラスの木造校舎、昼食は弁当持参でした。

中1の夏休み、うだるような暑い日に、同級生4～5名連れだって、高木小校区にある農業用ため池で泳ぎました。水深2～3mの青緑色、水底は冷たくスリル満点でした。ところが、泳いでいる最中に、御船中の先生方が突然現われ、職員室で全員きびしく注意を受けました。その時の楽しさも吹っ飛んでしまいました。

現在、全国の河や海で中高生の死亡事故が発生しています。「違反水泳が見つかって良かった」と今では思っています。

私が中1の頃には、不愉快だった時期がありました。同級生から「ゲタ」とか「エラ」と、あだ名で呼ばれた時でした。私の顔が角張っていたからでしょう。兄の勧めで剣道部に入り、毎日大声を出し、全身汗だくで体を鍛えていくうちに、あだ名で呼ばれなくなりました。おそらく、私の気力・体力が充実し剣道仲間の存在が大きかったと思います。

中2の時には、生徒会選挙の新会長に立候補しました。結果は見事に落選。がっかりしていた私に、剣道部のS先輩が「北本に1票入れたのに、残念だったな」と声をかけられ、この一言に励まされました。こういう貴重な体験等から、大勢の人前で話すことが苦にならなくなっていきました。

私は、中学から高校の剣道体験を通して、教科書には書いていない『免疫』ができてきたと思っています。部活動体験は、社会人になって役立っています。

思春期の中学生は失敗したり道に迷ったりする時期です。そんな時は、一人悩まずに家庭や信頼できる人と相談し、直面する壁を乗り越えて進んでください。

（学校だより 令和4年1月号）

ふるさとの先輩から

中熊博明さん（昭和36年3月 御船中卒業）

私が、御船中学校を卒業してから早いもので60年が経ちました。私は、何度か中学校の授業参観を経験させてもらいましたが、参観の度に感動することがあります。それは、先生方が生徒の中に入って優しく熱意をもって指導されており、生徒たちも明るく楽しそうに勉強している姿が随所で散見され、先生と生徒の間に距離がなく素晴らしい環境で勉強が出来ていることです。

私の中学時代は、終戦から10数年しか経っていないため、どこの家庭でもテレビなどを購入する経済的な余裕などはなく、食べるのに精一杯の状態であるため、進学を諦めて就職をする人が数多くいました。校内では、今では考えられないような喧嘩やいたずら、いじめなどが横行していましたが、憲法が保障する基本的人権について、マスコミを含めた社会全体が十分に理解していなかったためだと思います。

私は、御船中学校を卒業後、地元の御船高校から大学まで進学させてもらいましたが、尊敬する先輩から「戦後間もない日本人の平均寿命は50歳。これからの日本人は100歳まで生きる。昔の人より2倍も勉強できるし、2倍も善行を施すことができる時間がある。」と言って、古代中国の春秋戦国を生き抜いた儒家である荀子の勸学篇を読むように勧められました。勸学篇には、「人は生まれつき私利私欲に走りがちになるもので、必ずしも“性善”ではなく、むしろ“性悪”であって、これを善に正すべく努力する。これが人の道であり、従って、人間にとって重要なのは天賦の才ではない。後天的な努力や勤勉さ、善行の積み重ねである」と繰り返し説いてあります。御船中の後輩の皆さん、中学時代の学業成績だけで人間の価値は決められません。高校、大学、社会人となってもあらゆる努力を続けること、そして、善行を積み重ねることが人間として大切なことです。頑張ってください。

（学校だより 令和3年12月号）

ふるさとの先輩から

佐藤智子さん（緑川中卒業）

私たち同級生4人は、幼い頃からの仲間で、中学入学と同時に緑川中のソフト部に入部しました。私以外の3人は、体格も良く、守備も打力も抜群で1年目にしてレギュラーになりました。私は、当時は痩せて体格も中位。3人についていきたくて無理しながら練習し、私が左利きなこともあってピッチャーとしてマウンドに立てるまでになりました。友だちや部員、先生に励まされ、温かい眼差しに見守られて上達できたのです。私たち4人は、ライバルでありながら、エラーをすれば誰かがカバーし合う仲でした。数十年の歳月が過ぎた今も変わらない絆で結ばれています。

当時の部活動は、学校内を沸かせていて、ソフト部は2年生、3年生の時に連続して郡大会で優勝し、県大会にも連続出場しました。私たちの母校、緑川中は、その後廃校となりましたが、緑中ソフト部の全盛期を築くことができました。

来る日も来る日も部活に明け暮れましたが、勉強も部活も頑張るという気迫に支えられ、くたくたに疲れ汗にまみれても夜は宿題と闘いました。眠気覚ましにバケツの水で足を冷やし、天井等のいたる所に英語の単語を貼って覚えていたのは懐かしい思い出です。

その頃の一番の記憶は、真夏のジリジリ太陽の照りつける中で、マウンドの中央で一球一球のボールを握りしめたあの日のことです。緊張感が走り、吹き出す汗。自己との闘いでしょうか。この時、私は何事にも怯まない心や精神力が培われたと思います。今在る私の原点です。

私は社会に出て、「生け花」という“動”とは真逆の“静”の職業を歩いて参りました。

しかし、何処にであろうと、立志の時の姿勢は、マウンドに立った、あの気力そのものです。

当時の純粋でまっしぐらに努力を惜しまなかった日々が尊く思い出されます。

(学校だより 令和3年10月号)

ふるさとの先輩から

西田まきん（平成元年3月 御船中卒業）

私にとっての中学校の3年間は、人生の基礎になっています。中学校時代の一番の思い出は部活動です。 厳しい指導の先生と一緒に過ごしたことが思い出されます。姉が吹奏楽部に所属していたため、3年生の吹奏楽部員から練習見学に誘われました。その場の雰囲気ですら断るに断れない状況で入部してしまいました。

希望楽器はトランペットでした。しかし、ユーフォニアムというあまり知られていない楽器が担当になりました。しかし、この楽器の魅力に魂が揺さぶられました。ラジオの音楽番組や楽器のCDを探し求め、勉強を重ねました。また、顧問の先生がとても厳しく、年間の休みは正月とお盆くらいだったと記憶しています。繰り返しの反復練習で徹底した指導をしていただきました。目標は、県吹奏楽コンクール金賞。厳しい演習が辛いこともありましたが、仲間の支えや楽器・音楽の魅力で耐えることができました。顧問の先生や仲間のおかげで部活や音楽が大好きになりました。吹奏楽コンクールでは、金賞を受賞することもできました。努力することで結果はついてくる。夢は努力で現実になると知った瞬間でした。今でも、御船中で過ごすことができ良かったと思います。

中学生の皆さん、「努力することで結果はついてきます。夢は努力で現実になります。」

中学生時代は、自分の可能性を見つけることができる“原石”が無数にキラキラと散らばっています。

中学校生活の活動を一生懸命にやることで人生の可能性を広げられます。

私は、御船中で過ごしたことを誇りに思い、今も、御船中に感謝しています。

（学校だより 令和3年9月号）

ふるさとの先輩から

田中泰浩さん（昭和59年 御船中卒業）

私は御船町木倉の出身です。早いもので、私が御船中学校を卒業してから30数年が経ちます。

当時は、御船、木倉、滝尾、高木、小坂校区の生徒たちが御船中学校に通っていました。私たちが入学した年から5クラスになり、教室が新しく増築されたのを憶えています。

部活は、小学校から習っていた剣道部に入部しました。同級生部員は6名と多くはありませんでしたが、御船町武道館（現御船町役場第2分庁舎）で3年間、切磋琢磨しながら竹刀を降り続けていた思い出があります。その甲斐もあってか、3年生の中体連では、団体が優勝することが出来ました。とても貴重な経験になりました。

現在、我が子も御船中学校に通っています。久しぶりに昔と変わらない教室や廊下を見ますと、友だちと遊んだり勉強したりしていた当時の懐かしい記憶が思い出されるのと同時に、親子で同じ中学校に通えたことに、とても嬉しさを感じています。また、ご縁もあり、現在、PTA 副会長もさせていただいています。

子ども達のため、自分の母校のために何か出来ないかを考え、学校・PTA・地元地域と協力しながら少しでもお役に立てるように努めていきたいと思っています。

中学校の3年間は、心も体も大きく成長する時期だと思います。みなさんも友だちと楽しい時間を過ごし、勉強や部活動に頑張り、いろいろな経験をしながら将来の夢・目標のために一日一日を大切に、努力を積み重ねて自分を磨いてください。

（学校だより 令和3年8月号）

ふるさとの先輩から

沖田昌史さん（昭和46年3月 御船中卒業）

御船中学校を卒業してちょうど50年。京都での4年間の大学時代以外はずっと御船町に住んでいます。御船町の自然や歴史が大好きです。

私にとっての中学時代は、挫折と忍耐の時代だったと思います。剣道部に入ったものの、1年の夏に両耳難聴となり、その後手術して右は少し回復しましたが、左は全く聞こえず、現在も続いています。月に一度、学校を休んで国立病院に通院。部活もやめ、夏の水泳の授業も見学。御船小学校時代は器楽合奏部で、将来は音楽家にとの夢もありましたが、幻となりました。聞こえないこともあって、友達との会話も減り、休み時間は図書室で一人読書するしかありませんでした。

勉強は頑張りませんでしたが、図書室では、片っ端から偉人伝や小説を読み漁り、本が友達となり、卒業時には図書の貸し出し冊数が同級生を大きく引き離しての1番となっていました。

内向的で人と話すと吃音がひどくなり、よくクラスメイトに揶揄われることもありました。そんなコンプレックスの塊だった私が、図書室で森鷗外の『高瀬舟』に出会い、進学した御船高校で一人の先輩との出会い、自分の興味を知り、前向きに生きることの大切さに気付かされていきました。【幸せは自分の心が決める】という言葉に出会ったのも、その頃です。恵まれた環境で成績もトップクラスであっても、「思い通りにならない」と苦しむ同級生がいることも知りました。

同じ人生なら、できることに感謝し、「どうせ」とか「他人が悪い」と周りの人のせいにせず、「ありがとう」「おかげさま」を素直に声に出す人生を送りたいと思いました。

中学時代が楽しいと感じられなくても、必ず良い時が来ると信じるのが大切だと思います。今、町や地域、先輩や後輩に支えられて楽しく活動しています。御船中学卒業生で良かったと思います。

（学校だより 令和3年7月号）

ふるさとの先輩から

本田尚一さん（昭和46年3月 御船中卒業）

中学校を卒業して半世紀。私の思い出は、中体連大会（軟式テニス部）、生徒会活動、文化祭（合唱コンクール）、弁論大会等があります。その中で、最も心に刻まれているのは駅伝と受験勉強の両立でした。

中学3年の夏、部活動は郡中体連3連覇を達成し、受験勉強にシフト変換という時期になっていました。その時、恩師芥川満先生（当時体育主任、御船町在住）から、「陸上競技大会や駅伝大会に出てみないか」とお誘いを受けました。程なく、各部から招集された20人程が、御岳中学校での合宿から始まり、毎日ハードな練習と受験勉強の両立に挑むこととなりました。

日課は、朝夕の課外と普通授業を併せ9時間授業。放課後は陸上の練習があり、肉体的にも精神的にも厳しい毎日となりました。当初いたメンバーも一人、二人・・・と減っていきました。長距離走の記録向上と受験勉強への取組みの両立で、焦りと不安な気持ちがピークになりました。「苦しい」「逃げ出したい」。しかし、やるしかありません。そんな私たちに厳しくも優しくご指導いただいた先生方、物心両面で支えてくれた親、互いに励まし合った仲間たちの存在は大きく、おかげで何とか乗り切ることができました。陸上競技大会の結果は満足するものではありませんでしたが、それでも代表2000mで6位入賞。駅伝大会では団体3位、個人で区間2位。高校受験では希望校合格を勝ち取ることができました。本当にお世話になった方への感謝と充実感・達成感でいっぱいになりました。

今でも、同窓会で昔話に花が咲きます。あれから50年。これまでお世話になった方々への恩返しは出来たのだろうかと振り返る今日この頃です。

最後に、御船中学校生徒諸君へ次の言葉を贈ります。

「負けるな、負けるな。今の自分に負けるな。一つ一つに勝ちきって大声で笑おうじゃないか。そして今を楽しもう。」グッドラック！

（学校だより 令和3年6月号）

ふるさとの先輩から

野口真弥さん（昭和54年3月袴野中卒業）

私が卒業した中学校は、「益城町及び御船町中小学校組合立袴野中学校」という、ちょっと長い正式名称の学校ですが、児童生徒数の減少により、平成25年に惜しまれながらも閉校となりました。職員室をはさんで長い一本の廊下（100mぐらいあったかな）で小・中学校がつながり、小学1年生から中学3年生が同じ屋根の下で勉学を共にしていました。

昼休みともなれば、運動場に小学生や中学生が入り混じって、よくソフトボールをして遊んでいたことを思い出します。また、運動会や文化祭などの行事も一緒に実施していました。他の学校では経験できない、今思うと貴重な中学校時代だったように思います。

私が通っていた頃は、同級生が10人前後の小規模校になっていましたので、部活動はシーズン制（春～夏はバレー部、秋～冬は陸上部）で頑張っていました。顧問の先生からは「大きな学校に負けるな。君たちならできる。」と、叱咤激励の言葉をよくかけられました。バレーでは、当時県No.1の甲佐中にサービスエースでとった2点や郡中体連陸上大会1500mで3位入賞し、大会会長の講評の中で「小規模校でも頑張ればできる」と、ほめていただいたことを今でもよく覚えています。

小規模校で、一人何役も任せられていたので、とても充実し思い出多き学校生活でした。当時の恩師に憧れて教師の道に進み、現在も小学校の先生として頑張っています。

今振り返ってみると、いろいろな経験などが現在の自分につながっていると感じるものがよくあります。「人生にむだな経験など、何一つない」と思います。中学校生活の中で、“自分の可能性”や“まだ知らない自分”を見いだすために、いろいろなことにチャレンジしてみてください。

（学校だより 令和3年5月号）

ふるさとの先輩から

古閑謙治さん（昭和52年3月七滝中卒業）

幼少期は、上野の「古閑の原」という集落で育ちました。遊び用具を買ってもらうようなことはなく、すべて自分で作り出すものでした。常にポケットには小刀を入れ、時には家からなたやのこぎりを持ち出し、近くの山に行って竹を切ってきては、竹鉄砲や弓、竹馬等を作って遊んでいました。また、山に行って鳥の罠をかけたたり、川や天君ダムに行って魚釣りもよくしていました。その都度、どのようにしたら竹鉄砲が飛ぶようになるのか、どのようにしたら魚が釣れるのか、どのようにしたら鳥が罠にかかるのかなど、工夫を重ねていました。今になってみれば、「どのように工夫したらうまくいくのか」の考える力を培っていたように思います。地域の方々は、山に行くと勝手に竹を切ったり、罠をかけたたりしても何も言われず、温かく見守られ、よく声をかけていただき育ちました。

平成3年、教員として2校目で母校の上野小学校に赴任しました。そこでは、幼少期に見守っていただいた地域の方々、そして同級生や先輩後輩の方々に囲まれて7年を過ごしました。同級生のお子さんを担任させていただく機会にも何回か恵まれ、同級生からのサポートは、とても温かく心強かったことを覚えています。当時担任していた児童が今は立派な社会人として活躍していることを聞くと、うれしくなります。

平成29年には、教頭として木倉小学校に赴任しました。保護者の方々をはじめ、地域の方々が子どもたちのことを温かく見守り、たくさんの支援をしていただいていることにとてもありがたく感じました。地域と学校が子どもの健やかな成長を願って協力し合うことの大切さを学ばせていただきました。

御船町の豊かな自然、温かな人情に支えられてきたことに感謝の気持ちでいっぱいです。御船中学校の皆さんの活躍を町民の一員として応援していきたいと思えます。

（学校だより 令和3年4月号）

ふるさとの先輩から

竹下 渉きん (平成11年3月 滝水中卒業)

私は御船町内の水越出身です。中学校は、御船町立滝水中学校に通っていました。生徒数の減少により、平成13年4月に御船中と統合しています。

当時、同級生は私を含め7人。1学年上は5人、下は2人と、とても小規模の中学校でした。

全校生徒が少人数の為、部活動は男子はバレーボール部、女子は軟式テニス部。秋には掛け持ちで陸上を全生徒で取り組んでいました。

当時の10年程前が男子バレーボールの黄金期。県内でも屈指の強豪校だったようです。その栄光を証明するかのように、トロフィーが何本も並んでいたことを覚えています。そんな歴史と伝統のある男子バレーボール部の先輩方を目標に部活に励んでいたことを思い出します。

現在、我が子は御船中学校に通っています。ご縁もあり、過去にPTAの役員などを経験させていただきました。子どもたちの為に何かできないかを考え、取り組んできました。

今回、中学生時代・母校について寄稿をさせていただく機会を得、振り返ってみれば、私の中学生当時、私の親も含め保護者の皆さんや地域の皆さんの支えがあつての学校生活だったのかと気づかされます。

いつの時代も、家庭、PTA、地域と協力して子育てをしているのだと深く感じます。

最近、中学生の悲しいニュースなどを目にすることがあります。社会情勢が目まぐるしく変化する中でも、私たち大人が協力し合い、しっかりと子どもたちと向き合い、共に成長することがとても重要だと考えています。

未来を担う子どもたちの中学校生活は、一生のうち、たった一度きりの3年間です。

今一度、「今しかできないこと」を考え、皆さんも子どもたちと向き合ってみては、いかがでしょうか。

(学校だより 令和3年3月号)

ふるさとの先輩から

村上伸一郎さん（昭和51年3月 御船中卒業）

早いもので、この春、定年退職を迎えることとなります。自分は生まれ育った御船町が大好きです。子どもの頃は4丁目の竹山で“すみか”をつくり、御船川で泳いだり野や山をかけめぐり自然に触れ育ちました。小さい頃、よく父から体操を教えてもらっていました。そのころの日本の男子体操は黄金期。自分も将来オリンピックに出場することが夢でした。

御船小を卒業し、旧体育館に遊びに行った時のこと。体操部は練習していなく、練習していたのはバスケット部の先輩達。そこで運命的な出会いがありました。当時148cmの自分に、寄り添ってきた170cm以上の体の大きい先輩達から「バスケしたら身長が伸びるよ。」と誘われ、体操部ではなく友達と一緒にバスケット部に入部。練習はとても厳しく、辺田見1週のランニングやウサギ跳び、腹筋100回、足上げ腹筋10分、重りが入った靴で練習していました。14名程いた同級生部員は夏休みが終わると6名に減っていました。

新チームになり、とにかく強いチームと練習試合を行いました。100点差で負けた経験もあります。頑張った甲斐あって郡大会で優勝し県大会に2回出場しました。ここで忘れられない出来事が発生します。中3の最後の中体連。通常6月開催なのに、なぜかバスケットだけが11月に延期。部員みんなに衝撃が走りました。受験も心配だし、「やっとなれん。もうやめよう。」という気持ちになりました。しかし、当時キャプテンの河地君（現滝尾小校長）が「みんなやめても俺一人でも頑張る。」と言い切った言葉にみんなが奮起しました。そして、最後の中体連を優勝することができました。それから高校、大学、教員、一般と今もバスケを続けていますが、今の自分があるのは中学校での経験です。全ての人に感謝しています。みんなも夢や目標を持ち、努力を積み重ねて自分を磨いてほしいと思います。頑張ってください。

（学校だより 令和3年2月号）

ふるさとの先輩から

山本貴一さん（平成4年3月 御船中卒業）

子ども時代を御船町で育った私。当時は、御船での生活を嘆いていました。「御船って熊本市に通勤する人の町って感じで何も無いよな。何だか中途半端だな。」私は熊本市の生活にあこがれていました。将来も、都会でアナウンサーになって脚光を浴びるんだと調子に乗っていました。

そんな私に、小学校5年生時の担任の先生が「御船のいいところを探したらどう。」と言いました。私は初めて地図帳を広げました。御船と言えば“マイン”しか思い当たらない私。数々の石橋や吉無田高原、宮部鼎蔵などの名所旧跡、先哲たちをその時に知ります。

「御船にも自慢できるものがあるじゃないか！！。」単純です。それから「地図」に興味湧くのに時間はかかりませんでした。寝る前も地図。お風呂にも地図。とにかく地図が好きになりました。そんな地図好きが功を奏して、社会科教師という仕事に結びつくとは思っていませんでした。

それから、30年ほどが経ち、後輩たちに社会科を教えています。不思議な感覚です。生徒の中には、当時の私と同じように、都会にあこがれ、ふるさと御船のことを前向きに捉えられない生徒もいます。確かに御船町は物質的な豊かさに恵まれている方とは言えないかもしれませんが。しかし、自然環境や文化、歴史といった非物質的な豊かさ、心を豊かにしてくれるものに恵まれている「良い町」です。みなさんも心のどこかでは気付いているのではないのでしょうか。そんな中学生にお願いしたいことがあります。それは、「今ある財産を大切に、御船町の未来を考えてほしい」ということです。中学生にしか思いつかないような素晴らしいアイデアが出るような気がします。

「ふるさとの未来を積極的に考える」、そんな生徒を育てることが、ふるさとで教壇に立っている私の役割のような気がしてなりません。

（学校だより 令和3年1月号）